

山根安太郎先生著

「国語教育史研究」

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期は、世界各国とも、近代国語科教育が成立した時期のようである。わが国においては、明治三十三年（一九〇〇）の小学校令改正によってはじめて、「国語」科なる名称が用いられた。それまでの国語関係科目が整理統合された。中学校においても、明治三十五年（一九〇二）の「中学校教授要目」によって「国語及漢文科」の内容がくわしく規定され、その基本の態度は昭和期までひきつがれていった。明治三〇年代（二〇世紀初頭）は、わが国における近代国語科教育の成立期とみられるのである。本書「国語教育史研究」は、こうした近代国語教育史上のもっとも重要な時期に焦点をおいて、近代国語科教育の成立過程を、客観的・史的に明らかにしようとしてきた、きわめて密度の高い学術書である。

（詳目次は略）

序（清水文雄先生）

序章 国語教育史の構想

第一章 近世学校の近代化

- 一 江戸時代の高等教育
- 二 近代化の構想と庶民教育

第二章 近代学校の整備

- 一 近代学校の胎動
- 二 学制構想の進展
- 三 寺子屋の改組
- 四 学校の近代的整備

第三章 言語教育の展開

- 一 学制の国語教育思想
- 二 二種の教則
- 三 教則の普及
- 四 入門教材の編集
- 五 読本教材の内容
- 六 言語教育の体制
- 七 『尋常小学読本』

第四章 国語改革の運動

- 一 初期の漢字批判
- 二 かな文字論とローマ字論
- 三 国語理論の発展
- 四 国語改革の実践運動
- 五 教育界と国字運動
- 六 国語運動と国語教育

第五章 「国語」科の形成

- 一 学制以前の教科の構想

二 京都小学校の教科体制

三 学制教科の実施

四 教育令以後の進展

五 小学校「国語」科の成立

六 「国語」科成立の背景

第六章 国語教材の発展

- 一 「読本」以前の資料
- 二 「読本」形成期の教材
- 三 国語読本形式の成立
- 四 国語読本の発展
- 五 中等国語読本の定型の成立

国語教育史年表

索引

あとがき

まず、序章では、明治以降の国語教育史研究の動向が簡明にまとめられ、国語教育史関係文献目録がそえられている。

ついで本論にはいり、第一章・第二章において、近世の学校がしだいに近代化され、明治期にはいつて整備されていく過程が究明されている。近代国語教育史を、近世の学校にさかのぼって説きおこし、しかも学校教育全体の動きから説き進められるところに、山根先生の立場・態度をみる事ができよう。

さて、第三章においては、明治初期から二〇年代にかけての国語教育の展開がとり扱われている。明治初期の、外国語学習法を適用した言語主義的分節教科的国語教育が、しだいに整備統合され、国語教育としての自覚を深めていく過程が、教則、教科書、教授書の類を中心資料としながら解明されているのである。

第四章では、「国語改革の運動」がとりあげられている。ここにも、山根先生の国語教育史観をみる事ができよう。この章の結びで、山根先生は、「国字国語改良運動の足跡を回顧することによって、とくに我國がせおうている学校の国語科教育の立場と、その『言語教育』的意識のおこりきたるゆえんが示唆されるようにおもうのである。」(一八八ページ)と述べておられる。

第五章に進んで、「国語」科の成立過程・意義・背景が究明されている。先生は、「法令のおもてだけの变化を政治的な事実として機械的にあつづけるだけでは意味がなく、この時期までの国語関係教科の総合整理の研究が、模索のはてにこの教科統合に到達したものとみるのである。」(二二七ページ)とされ、制度上の交遷の中に「国語科教育観な

いし国語教育論の変遷成熟の過程」(二四〇ページ)をみておられるのである。

第六章では、近代国語科教育の成立過程が教材の面から明らかにされている。初期の旧態教科書群(往來物、漢籍類)、適用教科書群(識字物など)から、やがて「説本」が形成され、「尋常小学読本」へと発展していく過程が、教科書の題材・内容・構成・文字・文体等の面から分析され、究明されているのである。また、中等国語読本についても、落合直文編「訂中等国語読本」にみられるような範型が成立するまでの過程とその後のあゆみが明らかにされている。本章は、六章の中ではもっとも分量も多く、分析もきわめて綿密になされている。

最後に「国語教育史年表」と「索引」が付されているが、これも実に精細なもので、とくに年表では、雑誌記事もとりあげられている。貴重である。

なお、各章末に付された「注」も、見のすことのできないものである。本論の約六分の一の分量を占めるこの注には、ここではじめて明らかにされた事実・資料・見解も少なくないのである。

以上見てきたとおり、本書は、近代国語科

教育の形成過程の究明を主題として展開された本格的な国語教育史研究のみごとな結果である。

本書の性格について、清水文雄先生は、「『充実』ということばの重みを、文字どおり感じさせる本として、この書に比肩するものはまれであろう」と述べられ、その「重み」は、「単に活字面ではない、本研究に注ぎこまれた君の精魂、豊富な資料の精緻をきわめた布置、さらにはたぐいまれに密度の高い記述、これらの統合された、ある『もの』の重みである。」と述べておられる。本書の性格は、実にこのおことばにつきるであろう。

限られた紙数の中で本書の全貌を紹介することができないのは、まことに遺憾である。読者諸賢が、直接本書について親しく教えをうけられんことを願うほかはない。本書のご精誠を心からおすすすめしたい。(A5判、四五六ページ、昭和四一年三月二〇日、葎本積善館刊、上製一五〇〇円、学生版七五〇円)

(大槻和夫記)